

## 武蔵野日曜聖書講筈

## 一日一生

## ——マタイ伝第6章25～34節——

1993年9月19日

小池辰雄

神抜きはダメ 神眼・神耳・神足・神手・神心 一日一生 限りない世界を 霊体をいただき  
て その日暮らし キリストを飲み食らう 霊的生命

## 【マタイ6】

25この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。26空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。27汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。28又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。29然れど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。30今日ありて明日、炬に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。31さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。32是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らと神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。33まず神の国故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。

## ●神抜きはダメ

キリストのこういう言葉をうかがうと、キリストというひとはまったく詩人ですね。これは散文詩です。

25この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。

「何を食い、何を飲まん」

というようなことをとかく考えるのは、どうも男性の方が多いううだね、女の方は慎まし



いのですから。男はども、食べたり飲んだりすることに興味がある。

「何を着んと」

という方は、衣の方のことになる、男はあまり、

「あの人は何を着てたか」

なんて、全然そんなことは考えたことはないから、これは女性の方ですね。「何を着んと」という、着物の方は女のかたの方が大いに思い煩う。男性的なものと、女性的なものが自然にここに語られているように思われます。

要するに、人間が神ぬきにして、自分でもって食物のことを考えたり、着物のことを考えたり、住まいのことを考えたり、それはダメだと。

「神抜きはダメ」

ということ。ところが、自然の植物、動物、鳥類、これはみな神さまによって自然に与えられ、また動いている。そういう角度からの聖言だと思います。だから、自然界を見て、

「勞せず紡がざるなり」

という。それがいかに美しいか、

「ソロモンの服装もかなわない」

という。キリストというひとは自然を神の眼で見えられる。

「万物はキリストを通して造られた」

なんていう言葉もあるとおり、神の創造、神さまの創造力の角度から見えられる。だから、

「神抜きは生活はダメだ」

ということが、この言葉の奥の精神だと思えます。

「何を食らい何を飲まんと、また、何を着んと、男も女もそんなことを思い煩うな」

と言われる。食べる方飲む方は男だ。着る方は女のかただ。それをとかく思い煩う。

<sup>31</sup>さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。<sup>32</sup>是みな異邦人の切

に求むる所なり。汝らの天の父は凡て<sup>すべ</sup>これらの物の汝らに必要なるを知り給

うなり。

「異邦人というのは要するに神抜きだからダメだ。神さまに在つての在り方、キリ

ストに在つての在り方が大事だ」

ということ。こういうのは、特別に意識をしなくてもその角度になると、これが無意識のうちにならなってくれば、これは本ものになる。だから、大事なのは、その根源であるところの、<sup>33</sup>節です。

<sup>33</sup>まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えらる

べし。

「神の国」というのは

「神さまの支配していらつしやる所」



天界もそうだし、地上もそうだし。

「神の義」というのは神という義者だね、神という義者を体現したのはイエス・キリストです。パウロが、

「義人なし、一人だになし」

「キリストをおいて他に義人はいない」

と言った。「義人」とは何かというと、

「神さまの聖意みこころを行う者を義人」

という。この「義」という字は「良し悪し」ではない。

「神の聖意を行ずること」

を「義」という。神の聖意は究極的には愛ですから、愛と義とは離すことができない言葉です。ということとは、もうひとつ言うと、神と、一つにならなければダメです。

「神と一つになるということはキリストと一つになる」

ということですよ。

「キリストの中に自分を投げ入れる」

こと、これが一番大事なんです。だから、私は「しんこう」は「信じ仰ぐ(信仰)」とは書かない。神と交わる

「神交」

と書く。神交は神交わりです。「神」はその場合、キリストです。キリストと交わる。「交わる」ということは「一つになる」ということ、一如の世界になる。

それは、十字架という門を通れば、私たちは恐れなくキリストの中に入れるんだから。十字架という門を通っていく。キリストが、

「我は門なり」

というのはそのことです。

●神眼・神耳・神足・神手・神心

そうすると、神眼になる。神の眼になる。また、神耳、神の耳になる。神足、神の足になる。神手、神の手になる。神心、神の心になる。要するに、神なものも私たちの中に入っている。それが、創世記に書いてあるように、

「神の相すがたに即して造られた」

というのが、そのことなんです。あれは

「似姿」

ではない。

「即する」

という字です。神さまは相は無い。無相です。「無相の相」の相が即ちキリストです。



私たちはキリストの中に自分を投げ入れると——  
「己を棄てろ」  
とよく言いますね、キリストの中に棄てればいい——自分をキリストの中に棄てれば、生命づけられる。

「投身せよ」

というのは、キリストに投身する。それから、

「祈入」

とはキリストの中に祈り入る。なにしろ、すべて本当の世界は、一つにならなければダメです。だから、

「しんこう」というのは信仰ではない、神との交わりの神交だ」

と申し上げているとおりです。

そういう一如の世界、これは恩寵です。贖罪でちゃんと道が開かれているのだから、恐れなく入れる。

「こつち（自分の側）がどうだ、こうだ」

なんて、そんなことは要らない。十字架で、もう全部、片が付いているのだから。十字架で片が付いている所に入っていけば、もうそこで聖霊の世界に入る。

「十字架を本当に受けとれば、聖霊が必ずやってくる」

そういう、十字架・聖霊の不可分の関係を一般の教会でも、いわゆる無教会でも本当に受けとっていない。それでは、いつまでたってもダメなんです。

「自分の信仰」

なんて言って、信仰を私しているから、いつまでたってもダメです。いわゆる信仰なんか要らん。

そういうのが本当の世界で、キリストはまったくそうだった。

「我、何事も為し能わず」

「私は何も言えない。神さまが言えということと言っているだけの話だ。神さまが為せということを神の力でやっているだけの話だ」

と。だから、私は

「キリストは無者だ」

と言った。

「自分を何ものともしない」

のが「無者」で、無者が即ち「無限無量者」になる。

我々は十字架で無者にされているから、聖霊で無限無量の世界に入る。もう非常に簡単なんです。それを、

「私の信仰はまだです」



なんて、

「自分の信仰」

なんてことをいつまでも問題にして何になるか。ところが、一般の教会でも無教会でもみなその調子だから、ダメなんです。

●一日一生

「義を求めよ」

というのは、

「神の義者、キリストを求めよ」

ということ。「神の義」とはそういうことです。

「キリストを求めよ、そうすれば、みな何でもやってくる」

ということ。毎日がそのようにして、キリストと一つになっている。私が

「一日一生」

と書いたのはそのこと。一日をそのような質で生きていけば——朝から晩までそうはいかんでしよう、けれども、一日のどこかで本当の世界に、キリストと一つになっている世界に入れば——後のマイナスは全部プラスにされてしまう。本当のキリストという「1」のプラスは、「マイナス99」よりも凄い。私が今言う「一日一生」というのはそういうことです。あるいは、

「二刻一日」

です。或る一つの時がそれが一日である。或る瞬間を本当に生きれば、それでもう一生をちゃんと生きたということだ。そういう質の問題で、長さだの分量の問題ではない。そうすると、非常に気が楽になる。だから、

「思い煩う」

なんていう言葉がもう要らなくなる。心配が要らなくなる。

それが

「無即無限無量」

という境地です。キリストはまったくそうなんです。キリストは何も持っていない。裸足で歩いている。ところが、彼はちゃんと神さまに食べさせてもらっている。また、キリストは宿無しなんだけれども、至るところを宿にしている。

「お泊まりください」

と言われれば、そこで遠慮なく泊まる。キリストは托鉢僧みたいなものだ。それが、

「野の獣とか空の鳥とかは皆そうだ。そのように神さまに全托していけ」

ということ。

「お任せする」



ということをよく言うけれども、「お任せ」ということは、まだ自分がこちら側にいて神さまにお任せしている、というお任せではダメなんです。

「本当の全托ということはキリストと一つになる」  
ことです。遠慮なしに一つになる。

そうすると、一刻が一日であり、一日が千日である。一年が一生である。とにかく、そういうことになる。

「いっつぶつ倒れても、アーメン、ハレルヤ」

ということになる。「一日一生」と書いたのは、そういうことです。本当にその日暮らし。その日暮らしが一生を本当に暮らすことになる。

### ●限らない世界を

そういうことで、

「思い煩うことはいたしません」

ということ、それが本当の自然の世界なんです。或いは、霊然といってもいい。

「自然・霊然・神然」

という。本当に神然的な歩きかたをしたのはキリストだけです。全部、自分を無にして、神一切とする。これを神然という。自然の法則に、自然に従っているのを自然という。おのずから然りということ。人為はダメなんです。ところが、普通はみな人為で生きている。一生懸命に考えたり、心配したりしている。それではくたびれてしまう。

「投身」、「祈入」ということ。神の眼で、キリストの眼で見る。神の耳で聴く。神の足で歩くこと。

「思い煩うなかれ」

なんておっしゃったけれども、

「思い煩いなんていたしません」

とはつきり言えるんです。

「二日の苦労は一日にて足れり」

この言葉は天野貞祐先生が好きな言葉だった。

あなた方はみな若いんだから、今からもうその境地に入ったら、限りなく行く。私は「全き」という言葉は嫌いだ。

「全き」

という言葉は

「それでおしまい」

という言葉なんです。人間が完全を願ってはダメです。限りなき、限らない世界を、無限の世界を、無限を追求しなければダメなんだ。



「限りなき、尽きない無限の、終り無き世界、エンドレスの世界」  
 に向かつて進んで行く。

● 霊体をいただいて

私は、この世から次の世界に行くときに、

「死んだ」

なんて言わせないから。私は死んだのではない。往生する。往きて生きる。

「小池先生は往生しました」

と言わなくては。肉体は滅びるさ、けれども、今度は霊体をいただいて先の世界に往く。これはパウロがちゃんと言っているとおおりだ。

「肉の体あり、霊の体あり」

と言っている。コリント前書15・50～58に、

「50 兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。51 視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉とく眠るにはあらず、

世の終りは近いということキリストも使徒たちも皆そう思っていた。

52 終りのラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。

我らは肉体からいきなり霊体に化する。

53 そは此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。54 此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき『死は勝に呑まれたり』と録されたる言は成就すべし。

これはイザヤ書25章の言葉です。

55 『死よ、なんじの勝は何処にかある。死よ、なんじの刺は何処にかある』

これはホゼア書の言葉です。

56 死の刺は罪なり、罪の力は律法なり。

我々の罪が死をもたらすからね。律法が罪を刺激する。

57 されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を与え  
 たもう。

律法をのりこえて、罪の贖いをしてくださったから。

58 然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばなり。」(コリント前15・

50～58)

「主にありて」



ということが大事です。この「主にありて」でなければダメだ。

「復活」というのは、息を吹き返すことではなくて、新しい霊体をいただくことが復活なんです。キリストの復活だって、そうです。霊体で現れた。そして、霊界にキリストは行ってしまう。だから、復活のキリストが使徒たちの所に入ってきて来たでしょ。霊体のキリストというものは大変なものだ、戸が閉じている所にも入ってくるんだから。そして、お魚を食べた。あれは大変な次元ですよ。物語ではない。あれは本当です。

### ●その日暮らし

聖霊をいただいて、霊体的なものが既に内側に形成されていくから、何も心配は要らん。本当にそのように、十字架、聖霊にあつて、一日を生きるならば、それが本当の一生の質をもっているから、そこで、私は今日は

「一日一生」

と題に書いた。質的な話です。24時間のうち1時間でも、そういった境地に入れば、マイナス23よりもその1時間は貴い。そういう意味の

「その日暮らし」

です。それが「一日一生」ということ。その日暮らして、明日のことを考えない。

<sup>34</sup>この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり。

というキリストの言葉はそういうわけです。

要するに、

「キリストにあつて神と一つになっていく、投身していく」

それでないと、何かやっていて、本当の力がこないのは自分で分かる。私はものを書いていますけれども、その世界で書いている。

皆さん一人びとりは大事な使命をお持ちなんで、

「その人でなければできない仕事」

がある。どうぞ、それをなさってください。そして、神の栄光、キリストの栄光を現す。それが大交響楽になる。とにかく、その人でなければできない仕事を皆お持ちなんです。人にどう思われようと、そんなことはどうでもいい。それが

「宝を天に積む」

ことになる。

キリストの言は本当に力がある。全部、体験から体现している裏づけのある言ですから。そういう、キリストの言の凄さというものがだんだん分かってきた。決して、意味ではない。力なんです。パウロが、

「福音は言葉にあらず、力なり」



と言ったのは、そのことなんだ。

### ●キリストを飲み、食らう

だから、聖書くらい楽しい本はない。聖書を読んでいて、楽しくなかったら、まだ本当に読んでいないわけではない。聖書は理屈ではないんだから。光を与え、生命を与え、喜びを与える言ですから、単なる言葉ではない。

「キリストの思想は」

なんていう言い方をするのは、何言っているかと言いたくなる。思想ではないんだ。

そういう気持でキリストを飲み、食らってください。

「我を飲め、我を食らえ」

とキリストは言っているでしょ。ヨハネ伝6章に書いてある。

「お前たちは私を食らったり飲まなければダメだ」

と言ったら、ヨハネ伝6章52～71節に、

「52ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』53イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。54わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。55それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。56わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。57活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。58天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん』59此等のことはイエス、カペナウムにて教うる時、会堂にて言い給いしなり。60弟子たちの中におおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、誰か能く聴き得べき』」

「生命を一緒にする」と。

57活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も

我によりて活くべし。

「我によりて、はむしろ「我に在りて」と言った方がいい。

58天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん』59此等のことはイエス、カペナウムにて教うる時、会堂にて言い給いしなり。60弟子たちの中におおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、誰か能く聴き得べき』

弟子たちはキリストの言が分からないんだ。躓いている。

61イエス弟子たちの之に就きて咄くを自ら知りて言い給う『このことは汝らを躓かするか。62さらば人の子の原居りし所に昇るを見ば如何。63活すものは靈なり、肉は益する所なし、

言葉の上の矛盾みたいなことを言っている。

わが汝らに語りし言は、靈なり生命なり。

「私の肉をくらえ、私の血を飲め」ということは霊的な次元の話だぞ。キリストの靈



の生命、それを受けとれ」ということ。

64されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』イエス初はじめより信ぜぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。65斯かくて言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我きたに來るを得ずと言ひしなり』66ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復またイエスと共に歩まざりき。67イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』68シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。』

ペテロはさすがにこういう言葉を言った。

69又われらは信じ、かつ知る、なんじは神しんの聖者なり』70イエス答え給う『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の一人は悪魔なり』71イスカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを売らんとする者なり。』(ヨハネ6・52～71)

キリストを生命づけているところのもの、神の生命、

「それを食べ、それを飲む」

と、そういった靈的な事態のことをキリストが語っておられるのに、躓すいているわけです。

## ●靈的生命

「靈」は觀念ではない。普通の現実よりもっと凄こわい現実なんです。靈的生命というものは、聖靈を受けていればはつきりわかる。十字架の贖あがないを本当に受けとって、聖靈がくれば、キリストの言に躓すかないわけです。ところが、聖靈を受けてないから、みな躓すいてしまう。

「神・キリスト・聖靈」

は、「三位一体」というのは本当にそうなんです。

ソクラテスであろうと、孔子であろうと、何であろうと、どんな偉い哲学者でも、キリストにはかなわない。キリストというものは本ものだから。お釈迦さんが少し近いけれども、生命力が違う。そういうキリストの生命的な裏づけをもって語られている言が、

「わが言ことばは靈いのちなり、生命いのちなり」

というのがそのことです。私たちは結局、

「十字架を本当に受けとれば、聖靈がやってくるから、キリストの言が、またその行為が本当につかめてくる」

ということ。そうすると、一刻が一日であり、一日が一生である。そういう質的な本ものの、「永遠の生命」を毎日生きていくということになっていくわけです。

